



「歯の健康」から「全身の健康」へ これからの口腔保健



歯周病医療の変遷

「歯の健康」から「全身の健康」へ

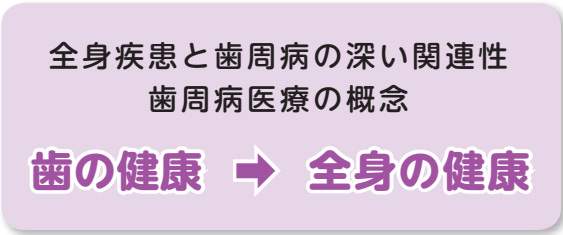
1950～90年頃まで、歯周病の病態研究はプラーク細菌の感染、宿主・細菌の相互作用、分子生物学的解析へと発展を遂げました。その間、歯周病療法は[症状改善]からプラークコントロールによる[原因療法]へ、予防啓発も[Cure]から[Care]へとシフトし、歯周病医療の概念も[Quality Of Life]を取り入れる方向に発展してきました。

しかし、1990年以降は“歯周病の発症は細菌によるが、感染への生体の防御反応産物、歯周病原菌やその内毒素(LPS)は病状の悪化だけでなく、全身にも負の影響を与える”という概念が台頭し、1990年代中頃には歯周病と全身の関係を示す病態研究がみられ始めます。

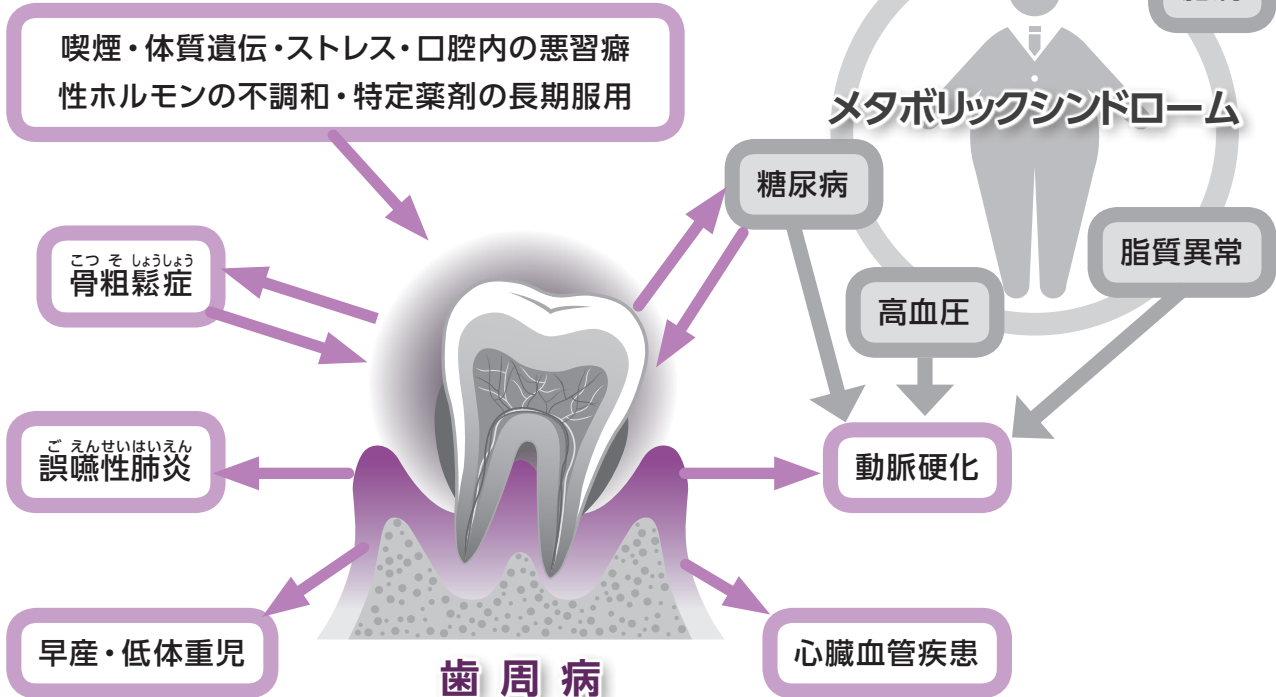
こうした研究により、生活習慣病をはじめとした“全身疾患”と歯周病の深い関連性が明らかになり、それに伴って歯周病医療の概念も[歯の健康]から[全身の健康]を目指すものにシフトしてきました。



1990年代中頃



歯周病と全身疾患との関わり



記事提供 (一社) 奈良県歯科医師会 出典: 「歯の健康」から「全身の健康」へ、これからの口腔保健」